

東北学院大学博物館の学芸研究員制度について

著者	辻 秀人
雑誌名	アジア文化史研究
号	11
ページ	165-166
発行年	2011-03-23
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024212/

東北学院大学博物館の学芸研究員制度について

辻 秀人(博物館館長・本専攻教授)

東北学院大学博物館は平成21年4月に組織として発足し、11月18日に開館した。博物館の使命は、大学がこれまでの活動の中で蓄積してきた知的財産を社会に公開すること、大学の教育活動の中に実物による実践的な教育を取り入れること、学芸員課程の実習に活用する資料と場所を提供することなどである。大学博物館としては、本来全学部を対象とした活動をすべきであるが、当面は歴史学科の研究成果を社会にお伝えすることを主眼として活動している。

本学博物館の組織は館長(文学部教授兼任)、学芸員2名(事務職1、文学部講師兼任1)、事務職(課長補佐相当職)1名、学芸研究員(大学院生)で構成されている。学芸研究員は本学

独自の制度で、学芸員の仕事を補佐し、博物館の運営(展示替え、パネルの整備、展示解説)や博物館実務実習の補佐(ティーチングアシスタント的な仕事)、オープンキャンパス、ホームカミングデー、大学祭などの催し物開催時に観客誘導、解説を行うことなどである。

博物館の開館準備から現在の運営にいたるまで、学芸研究員は様々な場面で活動している。本学の博物館常設展示は、展示ケース等を業者に発注し、学芸員の指導のもと、平成21年度に採用された5名の学芸研究員が展示作業を実施する形で行われた。また、平成22年度は10名の学芸研究員が歴史学科、アジア文化史専攻の教員の指導のもと、常設展示の展示替え(図

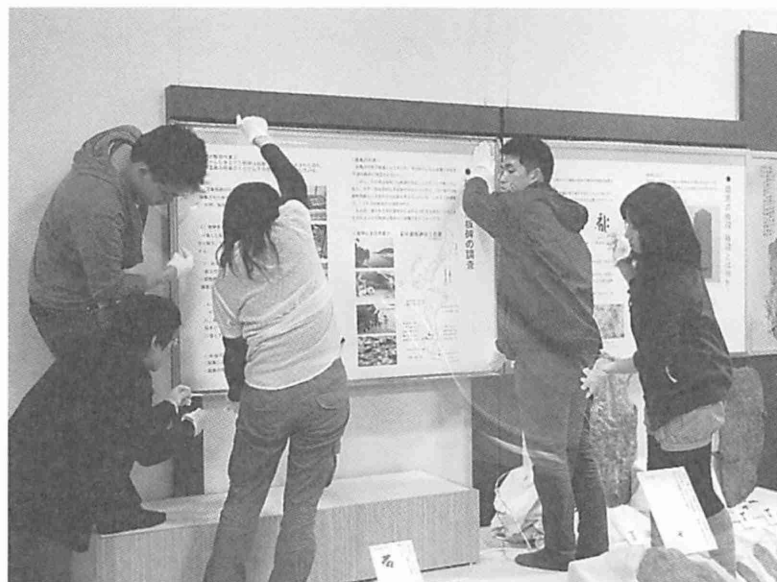


図1 展示替えを行う学芸研究員

1) や日常の展示解説などを行っている。

学芸研究員には本学大学院アジア文化史専攻に在学する大学院生を採用している。本来であれば博士後期課程の学生が望ましいところだが、現実には博士論文作成等との兼ね合いがあり、博士前期課程の学生も対象としている。

学芸研究員制度を設けた理由は、歴史学を専攻する大学院生が博物館において学芸員の指導のもとに技術を習得し、経験を積むことで、学芸員としての技量を向上させるとともに、制度として存在させることで博物館にかかわる一定の実績として評価されることを期待したことにある。ただし、学芸研究員は博士前期・後期課

程に在学する大学院生としての勉学が最優先であり、他に大学院のティーチングアシスタントもあるので、これらに支障をきたさないように、毎月打ち合わせを行い、1日を5区分してシフトを組み可能な範囲で勤務についてもらっている。打ち合わせの際にはゼミの調査や修士論文作成等の時間を優先し、勉学やゼミの活動に支障がないよう配慮している。

学芸研究員諸君には、博物館活動を通して、自らの研究と社会との接点を実感するとともに、自らの専門分野と異なる分野の学問成果や研究方法に関心を持ち、視野の広い研究者として育っていくことを期待している。